

男と女の 迷い道



ニヤリと笑える
10のショートストーリー

いちべえ

電車の座席に腰掛けて、リズムカルな振動に身を任せていると、どうしてもこっくりこっくりしてくる。

だが、今日の運転士は未熟なのか、やたらにブレーキの掛け方がきつく、居眠りをさせてくれない。傍らに置いた、ばかでかい旅行バッグも、手で押さえておく必要がある。倒れでもしたらタイヘンだ。

「痛っ！」

ほうら言わんこっちゃない。

向かいの席に座っていた、若鮎のようにピチピチッと跳ねそうな、若いねえちゃんの叫び声だった。

座るやいなや、例によって例のごとく化粧を始めたのだが、この電車じゃ危ないからやめとけ、と言ってやろうかな、でもヘタなこと言うと、天敵を食い殺すような目で睨まれるからよそうか、とずいぶん迷っていたのだが、とうとうやったか。

さっきからビューラーで睫をしきりにいじくっていたから、今のブレーキで睫の5、6本は抜けたかもしれない。

おそろおそろねえちゃんのほうに視線を向けた。

ねえちゃんの顔が視界に入った瞬間に、私は座席から飛び上がりそうになった。

痛っ、と声を上げたときのまんま半開きの口、形のいい鼻、つぶらな瞳の右目……、だが、その顔には左目がなかった。

ブレーキでグラツと揺れたとき、左目を引っこ抜いてしまったのか。

まさか、まさかと啞然として眺めているうちに、ねえちゃん少しも慌てず、化粧ポーチからペンシルを取り出して、手鏡を覗き込み、左目のあったあたりになにやら描きだした。

なんとも手慣れた手つきで、そこは瞬く間に、元の目よりさらに魅力的な目に仕上がっていた。

ねえちゃん満足そうに頷くと、今度は右目のほうを、消しゴムのようなものでゴシゴシとこすった。

なにもなくなったところに、また新しい右目を書いてゆく。くらくらっと、危うく引きずりこまれてしまいそうになりそうな、ほぼ完璧な目だ。

それなのに、できあがりのどこが気に入らないのか、ねえちゃん不服そうに首をひねり、いきなり鼻をもぎ取った。

その鼻を両指で粘土細工のように、コネコネこねくりまわしていたかと思うと、また元の場所にペタッと張り付けた。前のものより、いくらか細く高くなっている。その間もう私の口は開いたままだ。

ねえちゃんさらに、口を一もちろん私のバカになってしまった口ではなく一自分の口を引っぱがし、ルージュで新しいものを描き出した。



すっかりできあがると、手鏡でじっくり自分の新しい顔を検証する。

私に言わせれば、ふるいつきたいような顔るつきの美人だ。

だが、ねえちゃん、いやだわこんなのとばかりに、両頬を膨らませるや、その頬に両手を添え、電球をソケットからはずすときのように、首をくるくるっと回し始めた。

首から上がはずれると、膝に置かれたブランド物のバッグから、新しい首から上を取り出し、空洞になった首の穴に差し込んで、今度は逆方向にまわした。

取り付け終わると、再び手鏡を覗き込み、まあこれでしょうがないかという笑みを浮かべて、立ちあがった。ちょうど駅に着いたところだった。

座席に座ったまま、呆然と見上げている私を、悪戯っぽい目で睨み、小脇に抱えていた、さっき取り外した「前首」を私に差し出し、

「わたし、もうこれいらぬから、オジサンにあげる」

私の膝の上に「前首」を押しこむように載せると、じゃあねえ、と手を振ってねえちゃんは軽やかにホームへと降りていった。



電車が発車するのを待って、私は旅行バッグを開けた。

バッグの中には、首から上のない肉体が入っている。妻の体だ。

「お待たせ」

と言いながら、ねえちゃんからもらった首を、妻の胴体にキュキュッと回してはめ込んだ。少しサイズが大きいようだ。

しばらく手鏡を睨みつけていた妻は、やがて洗面をつくった。予想通りの反応だ。

「美人だけど、ありふれてるわ」

「そうか、やっぱり気に入らないか」

「お下がりだもの……」

私は首から上をはずし、床にそっとおいた。下手くそ運転士のブレーキがかかり、首から上は前方にコロンと転がり、悔しそうにアカンベーをした。

私は再び、首のない妻を旅行バッグに押し込み、車内化粧をしている別の若い女を物色しに、次の車両に移動していった。

ソウシヨク系オヤジ

「ソウシヨクケイじゃなくて、ソウシヨクケイだわねえ」

気持ちよく飯を食っていると、突然カミサンが、感に堪えないように、私の顔をしげしげと見た。

「なにわけのわからないことを言ってるんだ」

私は居候ではなく、れっきとした亭主だから、三杯目を堂々と出した。

「草食系の若い男の子が増えてるって言うじゃない」

「ああ、肉食草食の、草食ね。頼りないったらないねえ、ああいうの」

それにしても、この豚肉の生姜焼きは固い。焼き過ぎだ。カミサンは妬きモチ焼きだから、なんでも焼きすぎてしまうのだ。

「でも、やさしいから、女の子にもてるらしいわよ」

「情けないねえ」

私はフンと鼻で笑って、三杯目を平らげる。食った食った、大満足。

「やっぱりソウシヨクケイだわ」

「誰が」

「あんた」

「俺が草食系なわけないだろう」

「その草食じゃなくて。朝食。早食いのほうの朝食」

うまいこと言うなあ。たしかにその通りだ。今の食事時間も5分とかかかっていない。ご飯茶碗一杯の米の飯が2分弱。立派なもんだ。早飯早糞芸のうち、と言うではないか。

それがどうした文句があるか、だ。

「おまけに小食じゃなくて大食。これじゃ女の子にはもてないわねえ」

ん？話が妙な所にいきそうぞ。

新手的誘導尋問かもしれない。うっかり、もてないわけないじゃないか、なんて言おうもんなら、追及してくること必至だ。

「もてない、もてない。こういうオッサンは力はあるけど、もてない」

「ムキになって言うところが怪しい」

ひょっとして、この間入社3年目のY子に手を出したのに気づいたか。まさかまさか。

「こんなソウシヨク系、草のほうじゃなくて、早いほうのソウシヨク系オヤジで、加齢臭に脂ギトギト、いちばん若い女の子に嫌われるのだ」

嫌われたって手は出せる。体力、気力、迫力、金力、どれをとっても若いやつらに負けない。

「若い女の子ねえ～」

カミサン、ギロツと睨んだ。　しまった。若いだけよけいだ。

「オバサンも避けて通るぞ」

「そうねえ、それだけ早食だと、いかにも飢えてるみたいで、敬遠されるわね」

「そうそう。犬でも猫でも、メスは近寄ってこないぞ」



再びカミサン、ギロギロッと睨んだ。言いすぎたか。

「まあいいわ。じゃ、片付けて洗いものしますから」

ホッ。どうやらやり過ごせたらしい。

「それにしても」

カミサン、立ちあがりかけて言う。

まだ終わってないのか。

「あんまり朝食すぎて、味のほうもわかんないでしょうねえ」

なんだ、そっちのほうか。

「そんなことはないさ」

「生姜焼き、ちょっと苦くなかった？」

「いや、いつもと同じだよ。最近歯が弱くなってきているのか、少々固く感じたけどね」

うーん、なんとも気を使うなあ。

「そう、それならいいけど」

「なにかあったのか」

「ちょっと新しい化学調味料使いすぎちゃったのよ」

そう言って、カミサン、謎のような微笑を浮かべた。



その日以降、私の前にぶらさがるものは、小便をするためだけにしか用を為さなくなった。

私の大事なものは、草食系でも肉食系でもなく、単なる装飾系になってしまったのだ。

ポチに願いを

部屋の片隅にポチがいる。

可哀想に、夫に何度も何度も蹴飛ばされたものだから、もうずいぶん前から動けなくなっている。

夫は、こんなもの早く捨ててしまえと、折に触れ怒鳴り散らす、私にはそんなこと到底できない。

仕事中毒だかなんだか、毎日帰りの遅い夫を待って、ポチと一緒に過ごした時間は、私にとって宝石のように大切な時間だったのだ。中身は無機そのものの機械に過ぎないのだが、どんな生き物より、私には愛しい存在だった。

ねえ、ポチ。

同意を求めても、ワンとも言わない。以前なら、頭を撫でられに、トコトコすり寄ってきたのに、ピクリともしない。

「あんな人、消えてしまえばいいのにね」

思っていることが、つい声に出てしまう。

神様にお願いしてみようかな。それとも、星のほうがいいか。

そういえば「星に願いを」なんて歌があったっけ。星に願いをかけたら、なんでも叶うという、オメデタイ歌。

願うだけでなんでも叶うなら、誰れ〜も苦労しないわよね、ねえポチ。

それともポチにお願いしたら叶うかしらね。星にじゃなくて、ポチに願いを、だわ。しょうもないオヤジギャグそのものね〜。

でも、試しにやってみる。

「ポチお願い。目障りなあの人、夫を消してしまっ！」

ん、なんかポチの目が光って、頷いたみたい。願いをきいてくれたのかしら。

でも気のせいだわ。

玄関のドアがギコギコ開く音がするもの。夫と同じように、この家のドアは老朽化して錆ついている。おまけに夫の頭と同じように、塗装もハゲちよろけだ。

あのドアの閉め方は夫のもの。ドアに恨みでもあるような、バシんとひっぱたくような閉め方。「ただいま」とも言わず、脱いだ上着を私に投げつける。機嫌が悪いという空気が、上着のまわりにまとわりついている。いつもいつも不機嫌なのだ。

私は、夫の顔を見るのもいやだから、というだけじゃなく、そうしなければならないから、下を向いたまま、上着を抱え、夫の後ろをついていく。

夫が歩きながら脱いでゆくズボン、ネクタイ、ワイシャツ、シャツ、パンツを順々に拾い上げる。

そう夫は、帰宅すると廊下でパンツまで脱いでしまうのだ。夫の”あんなもの”なんて見るのもおぞましいから、着替えが終わるまで、ずっと私は下を向いているというわけ。





だが、ついふっと夫のいるほうを見てしまった。なにかいつもと違う雰囲気を感じたのだ。

そこに夫の姿はなかった。

「なに変な顔してるんだ、風呂入るぞ」

私は口をポカンと開けたまま、声のしたほうを見つめる。

「おかしなやつだな。沸いてるんだろ」

私は慌てて虚空に向かって何度も頷いた。万が一お風呂ができてなかったら、それこそ大暴れされるに決まっているのだ。なにもないところから、いきなりパンチがとんできたら、避けられっこない。

風呂場のドアを開く音がし、しまる音がし、浴槽からお湯をかける音がし、浴槽に入る音がし、ザバザバとお湯があふれる音がし、満足そうな意味不明の喜悦の叫び声があがり、調子はずれの鼻唄まできこえてきた。

その間、夫の姿はチラッと見えない。私の目がどうかしてしまったのかしら。

まさかポチが……。

腰が抜けてしまったみたいになった私は、這いつくばってポチのそばまで戻った。

「ポチ！ポチ！たいへんよ、あの人が消えてしまったわ」

ポチが笑ったみたい。

「ホントに、ポチ、私のお願いをきいてくれたの？」

ポチがまた頷いたみたい。

「でもねポチ。あの人を消してしまっただけというのは、こんなふうに見えなくしてしまっただけのことじゃないの。これじゃ不気味なだけだわ」

ポチが首を傾げたような気がする。

「消してしまっただけというのはこの世から消してしまっただけのことなの」

ここまで口に出してしまっただけから、慌てて口を押さえた。

私ってなんてことを！

ポチがなんだそういうことだったのかという顔をして、もう一度私に微笑みかけた。

夫の鼻唄が、突然途絶えた。



息子が、
「父の日のプレゼントはなにがいい？」
ときくから、
「そりゃ大きくて、丸くて、張りのあるのがいい」
と答えてやった。
息子は目を丸くして、マジマジと私を見つめた。

「ママ、なに言ってんの！父の日だよ」

「だからチチの日」

私は自分の薄い胸を指差す。

しばらく怪訝そうに、目をキョトンとしていた息子は、やがて、

「ヒョウキンだなあ、ママは」

と口をイッパイに開けて、無邪気に笑った。そんな笑顔に接すると、ほんとうにこの子の母親で良かったなあと思う。

「チチはチチでも乳じゃなくて、お父さんの父だよ」

そんなことわかってるわよ、と私も笑顔を返す。

「お父さんと言っても、ママはシングルママだから、あなたにお父さんはいないのよ」

息子は寂しそうに俯く。

長い睫の影が、私の母性愛をくすぐる。この子のためならなんでもしてあげたい、と鼻の奥がツンとしてくる。

「そうだ！」

と両手を打ち鳴らした息子の顔が、パッと明るくなった。

「父の日にはママに、お父さんをプレゼントしてあげよう～」

やだこの子はなに言ってるのよう。思わず頬が熱くなる。

「ママ、どんなお父さんがいい？」

そりゃ、頭が良くて、ハンサムで、優しく、背が高くて、お金があって、と言いかけて、慌てて首をふり、

「あなたがいいと思うお父さんでいいわよ。あなたが大好きになりそうなお父さん」

「ほんとにそれでいいの？」

「いいのよ、それで。そしたら3人で仲良く暮らしましょうね」

「うん、わかった。じゃ、ぼく探してくるね。ママが喜ぶような素敵なお父さんを探してくるね」

息子は元気よく家を飛び出していった。

気をつけて行くのよう、とその弾みに弾んでいる後姿を見送りながら、私は思う。

5月5日の子供の日、息子はこの家に現れた。

それから1週間ほどあとの母の日に、息子へのプレゼントとして私は贈られてきた。

今度は父の日の番だ。

きっと、親子3人の、つつましいけど暖かい家庭ができるだろう。

だが、とそこで私の微笑みは凍りつく。

9月が来るのが怖い。

9月の敬老の日に、意地の悪い姑が、ポンと贈りつけられてくるかもしれないのだ。

息を止めて

夫の息が止まった。といって、死んだわけではない。いわゆる睡眠時無呼吸と称するものだ。窓のカーテンをビリビリ震わすほどの、喉奥の蓋だか膜だかの激しい振動がピタリとやみ、そこから怖ろしいほどの静寂が寝室を支配する。

私は、1、2、3……と密かに胸の中で数え始める。このまま止まったままだったらどうしようという不安と、ままたらまでいいという期待がちょっぴりで、胸がドキドキしてくる。

でも、40ほど数えると、喉がひっくり返るような、鼻の粘膜が引き剥がされるような、クシャミを巻き戻したらこんな音かというような音があがり、静寂は破られる。

苦しそうに顔を歪め、首を激しくふる姿に、よく首から上がもげないものだと思う。

そして再び荒い寝息から、盛大な鼾の洪水。

私は目を瞑り、ひたすら眠ることに努める。以前だったら眠れなくて苛々していたものだが、この頃はそんなこともなくなった。

「あなた、寝てる時時々、息が止まることがあるわよ。一度病院に行ったら」

と、忠告してやったことがあるが、返ってきたのは、うるさそうなフンという笑い鼻と、ギョロツとした怖い目だけだった。

それ以来私はもうそのことに触れないことにした。いつも不機嫌なのは熟睡できないせい、とわかっていても、そのとばっちりを受けるのはもうたくさんだった。

それで夫の寿命が縮まっても、私の知ったことじゃない。

また夫の息が止まった。

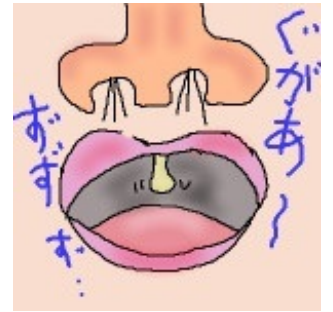
私はもう一度数を数え始める。1、2、3……。胸を押さえ、息を詰めて念じる。そのまま、そのまま。11、12、13……。夫の息が止まっている間に私は眠ってしまうのだ。

そのまま、そのまま。静寂のまま。私は更に息を詰めて念じる。そのまますっと静かに大人しくしててね。21、22、23……。そう、そう、その調子。

そうすると、甘美な睡魔が私を包み込み、喪服姿の、私ではないような美しい私が目に浮かび、夫の若い部下たちの熱い視線を感じ、やがて私は至福の眠りの底に落ちて行く。

翌朝、夫は歯ブラシを口に突っ込んだまま、モゴモゴとまだ半分眠っているようなのんびりした声で言った。

「お前も、寝てる時、呼吸が止まるなあ」



ミキちゃんは酒が入ると、妙に色っぽくなって、

「ねえ、専務」

なんて斜めはすかいに下から見上げられると、背中がぞくっとしてくる。

「専務みたいな人と一緒になりたかったな」

「おいおい、なに言いだす。そんなに飲んでないのに酔っ払っちゃったのか」



「酔ってなんかいませんよ～。酔ってこんなこと言うもんですか」

長い睫毛をしばたたかせて、口を尖らせる。透明感のある白い肌がほのかに染まり、そんな顔を近づけられると、私にはまったくその気はないのに、吸い寄せられそうになる。

「じゃ、悪い冗談だ」

「冗談なもんですか。専務が総務部の部長で、私が配属になったころから、ずっと専務のこと好きだったんだから」

「バカなことを言うんじゃないの」

「バカですよ～。私はどうせバカですよ～」

盛大に身をよじらせる。私が呆れて黙っていると、

「あ、また若い子みたいに拗ねてる、なんて思ってるんだ。似合わないですよ、どうせ。もう三十なんだから」

「年の問題じゃない」

「専務は還暦で、年の差は三十。問題ないですよねえ」

言っていることがムチャクチャだ。

「もういい加減に切り上げて、家に帰りなさい。明日君は結婚式を挙げる身だよ」

ミキちゃん、大げさに天を仰いだ。

「あ～、やだやだ。結婚なんかしたくない～」

「なにを言ってるの。人も羨む美男美女のカップルのくせに」

「玉の輿だか、逆玉だかしらないけど、どうせ政略結婚じゃないですか」

「私は派閥など作らない」

恨めしげな視線が私を突き刺す。どう言い繕っても、今度のミキちゃんの結婚が、私の地位を強化してくれるのは事実だ。だが、そんな計算だけで、私はこの話を進めたのではない。

どうみても似合いのカップルで、私の家で開かれた見合いもどきの席から、気が合ったよう。その後の親密な付き合い方からいって、相思相愛だと思っていた。だから進めたのだ。

ミキちゃんの私に対する思いはうすうす感じてはいたが、親子以上の年の差からいって、まさかまさかだったのだ。

「専務、せめて今夜一晩だけでも、ダメですかあ」

目にイッパイ涙を溜めて、迫ってくる。

「ダメダメダメ」

「ダメダメダメも好きのうち～」

「ダメなものはダメ」

「ダメなものはダメじゃない」

まいったなあ。なんとしても、早くタクシーに押し込んで、家に帰してやらなくちゃ。

明日私は結婚披露宴の主賓として、こんな挨拶をしなければならない立場なのだ。

——新郎三木義彦君は我が社の次代を担うホープ中のホープでして、私が我が社初の女性重役に就任して以降も……



緊急停車

「線路内に、人が立ち入ったという情報がありましたので、しばらくこの電車は現在位置に緊急停車いたします」

またかよ。

このところ毎日のように、どこかの路線で電車が停まる。

あとちょっとで次の駅に着くというのに。駅にはこの間つかまえた新しい彼女が待っているのだ。

またアナウンス。

「どうやら人ではなく、幽霊のようです」

ん？なんだこの車掌。

停車している電車のなかで、乗客が退屈しないように、一人芸でもはじめようってのか。

「今朝ほどこの先の踏切で、人身事故がありまして、そのとき死亡した方の幽霊のようです」

おいおいシャレにならないぞ。

「お客様のなかに、江崎謙一郎という方はいらっしゃいませんか」

俺の名前だ。

だが、同姓同名、字違いということもある。

「xx市にお住まいの、江崎謙一郎様です」

いよいよ俺だ。

「いらっしゃいましたら、至急車掌室までお出でください。幽霊がお会いしたいと言っています」

なにバカなことを。幽霊に知り合いなどいないぞ。

「是非ともいらしてください。そうしないと電車発車できません。お願いいたします」

困ったなあ。みんなにジロジロ見られながら、最後尾の車両に行くなんて、赤っ恥はかきたくない。

「是非と……、あ、江崎さまですか。よくいらしてくださいました。どうぞどうぞ」

ほえ～。同姓同名で同じ市に住むやつがいるのか。なにはともあれ、ホッとだな。

「えっ？違う？この方ではないのですか。こんな年寄りじゃなくて、もっと若くてイケメンですって？あのお客様、お名前を。こりゃご丁寧に名刺を。は、イザキケンイチロウ。は、は、なんとも。お客様、イザキじゃなくて、エザキでございます。だからエザキだろうって。あの、お客様、お客様はイザキ、呼びしているのはエザキ。イじゃなくてエなんでございます。だから同じだろうって、あのお客様は東北のほうのお生まれで……」



こんなときに下手な漫才やってんじゃないよ。みんな、爆笑じゃなくて、失笑じゃないか。

車掌、しばらくマイクの前でゴシャゴシャやってたと思うと、





「失礼いたしました。改めて呼び出しいたします。イじゃなくて、エのほうのエザキ様、どうぞいらしてください。幽霊さんが怒っています」

幽霊に「さん」つけてやがる。よっぽど怖いんだ。

「若くて、イケメンで、女ったらしのエザキ様、どうかどうか……」

ときたら、やっぱり俺だなあ。こりゃ行かなくちゃならないなあ。

そこまで思ってから、はたと気づいた。いつも気づくのが遅いのが、俺の欠点だ。

幽霊のやつ、あいつかもしれない。

2週間ほど前に捨てた女だ。

車掌が、幽霊を男とも女とも言わないから、わからなかったのだ。

別れ際女は、電車で飛び込んで死んでやる、などとほざいていた。

やれるものならやってみろ、と俺は啖呵を切って、プイッと後ろ向いてカッコよく去っていったのだが、ホントにやっちまったんだ。

そうとなったら、車掌室に行くなんてとんでもない。

シカとシカと、知らん顔を決め込もう。

周りの連中、誰も、俺がそのエザキだなんて、わかりやしなないんだ。

「エザキ様、江崎さま、いらっしゃいませんか！」

いらっしゃません、いらっしゃいません。俺は目をつぶって、寝たふりをした。

「エザキさま～！わっ、幽霊さん、そんな怖い目で睨まないでくださいな。絶対に乗っているはずだ。来ないのはおまえのアナウンスが下手なせいだ。そんな、そんな、ムチャクチャ言わないで。エザキさま～！エザキ！」

うるさいなあ、あんまり叫ぶと喉がつぶれるぞ。

「エザキさ……、えっ、あと3分で来なかったら、私を呪い殺す。そんなそんな、私だって家に帰れば、女房一人に、子どもが3人もいるんですから…エザキさま～、お願いお願いお願い～！」

知らない知らない知らない～。

「来て来て来て、来てくださ～い、エザキさ～ん」

泣いてやがる。

それにしても暑い。車掌のやつ、逆上して冷房を切ったな。酸素不足だ。息苦しいぞ。

「たいへんお待たせいたしました。安全が確認されしだいまもなく電車発車いたします。江崎様はどうとう現れませんでした。いまさっき幽霊さん急に、もう用件はすんだと言って、ニコニコしながら消えていきました。なにがなんだかわかりませんが、ともあれこの電車まもなく……、ん？なんだって？……まったく～、今日は仏滅かあ、13日の金曜日かあ……、あっ、タイヘン失礼いたしました。いま、車内に急病人が発生したという知らせが入りました。次の駅で搬送いたしますので、重ね重ねご迷惑をおかけいたしますが、この電車、次の駅でしばらく停車いたします……えっ？急病じゃなくて、重病……、もう息をしていない……」

エコ呼吸

えっ、なにをやってるんだって？ああ、なんか苦しそうにみえるんですね。

いえいえ、具合などちっとも悪くありませんよ。

エコ呼吸ですよ。エコは、いま流行りのエコのエコね。

スッスッスッハ。これですよ。

三回吸って、一回吐く。

これやると、呼吸のときの二酸化炭素排出量が3分の1になるんです。

あなたも、地球温暖化防止のためにやってみませんか。

信じられない。眉唾ものだ。ごもっとも、ごもっとも。

でも、ダメモトと思って、やってみてください。そのうち効果が出ます。

一日数回でもいいのです。

スッスッスッハと一日数回。これだけでいいんです。簡単でしょ。

はい、ご一緒にスッスッスッハ。そうですそうです。スッスッスッハスッスッスッハ、なんか気持ちいいでしょ。

それじゃ先を急ぎますので、失礼しますね。

なにせ、これを全世界に広げるつもりなんで、忙しいのです。

世界中の人がやれば、地球温暖化を阻止できるのです。

ではでは、ごきげんよう。

こんなことをペラペラ喋って、男が私の前から去って、もう1カ月たつ。

でも、スッスッスッハとやってる人を見たことがない。

こんなアホなことをやる物好きなどいないのだろう。

かく言う私……、

実はやっている。でも、恥ずかしいので人前ではやらない。こっそりと隠れてやっている。

食前食後にスッスッスッハ、小便大便スッスッスッハ、寝る前起きぬけスッスッスッハ。

やると妙に気持ちいい。

地球温暖化防止に貢献していると思うと、なおさら気持ちいい。

あなたもしてみませんか？

えっ、あなたも家でこっそり。

そうですかそうですか、あなたも私と同じですか。

じゃ、一緒にやりましょう。

スッスッスッハスッスッスッハスッスッスッハ。

この3回連続がいちばん気持ちいいんですよ。

5回がいい？ ほうほう。

スッスッスッハスッスッスッハスッスッスッハスッスッスッハスッスッスッハ

なるほどなるほど、あまりの気持ちよさにクラクラしますな。



えっ、その二人なにやってるんだって？ああ、なんか苦しそうにみえるんですね。
いえいえ、具合などちっとも……。

了

自分探しの旅

たしかさっきまでいたはずの『自分』がいなくなってしまった。

『自分』を失うと困るので、探す旅に出た。

『自分』恋しやホウヤレホ、と歌いながら行くと、川に出た。

お爺さんが洗濯をしていた。

「ぼくの『自分』を見掛けませんでしたか」

お爺さんは訝しげな目をした。

「はて？このところずっと、誰の『自分』も見てないよ」

「お爺さんの『自分』も見てないのですか」

「そんなもんこの年になって、あるもんかね」

「お婆さんはどうしてるんです？」

「ずいぶん前に『自分』を探すと行って、家を出て行ったきりさ」



『自分』恋しやホウヤレホ、とまた歌いながら行くと、草原に出た。

ちがうお爺さんが、枯れ木の上で灰を撒いていた。

「ぼくの『自分』を見掛けませんでしたか」

お爺さんは灰が入ったのだろうか、目をやたらこすった。

「わしも『自分』が小さくなってしまったから、いまこの木に新しい『自分』を咲かせようとしているところだ」

「咲きますかね？」

「咲くとも咲くとも。おまえさんは自分探し、わしは自分咲かし」

どこのお爺さんも、寒いダジャレがお好きなようだ。



『自分』恋しやホウヤレホ、とズンズン行くと、畑に出た。

今度もお爺さんがいて、畑を掘っていた。

「ぼくの『自分』を見掛けませんでしたか」

お爺さんは、ぼくをギョロッと睨んだ。

「おまえも探しているのか」

「はい、もう長いこと」

「わしは、たしかこの辺に埋めておいたはずと思って、掘り起こしているところだ」

「ぼくのも埋まっているのでしょうか」

「他人の家の土地に埋めてはいかん。自分の家の土地に埋めなさい」

自分の家の土地と言っても、ぼくはアパート暮らしだから、持っていないのだ。

『自分』恋しやホウヤレホ、とずっとずっと行くと、海に出た。どうやら世界の果てのようだった。

ここで見つからなかったら、もう『自分』はどこにもいないのだ。

海のほうから、またまたお爺さんがあがってきた。

大きなツヅラを肩に背負っていた。

「ぼくの『自分』を見掛けませんでしたか」

お爺さんの細い目がニッコリ笑った。

「『自分』なら背中の中のツヅラにイッパイ入っているよ。鬼が島から取り返してきたんだ」

「わっ、ぼくのもあるでしょうか」

「わからんねえ。探してみるか」

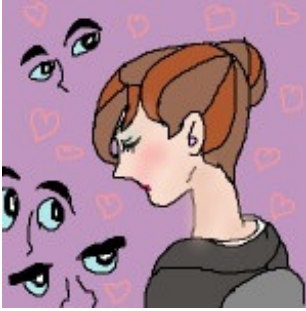
お爺さんは、ツヅラをよっこらしょとおろし、南京錠をはずして蓋を開けた。

白い煙がモクモクとあがった。

なんだかどっとくたびれてしまったので、家に帰ることにした。

玄関のドアを開けると、『自分』はとっくに戻っていて、座布団に胡坐をかいて、ちゃっかりイッパイやっていた。

『自分』の髪の毛はすっかり白くなっていた。



妻が亡くなって五日たつ。

私は白い布に包まれた骨壺に手を合わせた。線香を立て、チーンと鐘を鳴らすと、骨壺から湯気のようなものが立ち昇り、妻の朧な姿が現れた。

妻は咎めるような目で私を睨んだ。生前もきつい性格だったが、死後はさらにひどくなったようだ。毎晩現れては私を責める。

「あなた、私を殺した犯人はまだ見つからないの！」

「見つけたよ、やっと」

私はおどおどと答えた。妻の尻の下で過ごした長い年月が、私をかなり卑屈にしていた。

妻の顔がいっぺんに晴れやかになった。ジェットコースターのように感情の起伏の激しい女なのだ。

「へ～、あなたみたいに無能な人がよくやれたわね」

「なんとかね」

生きているあいだ、何度無能と罵られたろう。死んでからまでバカにされたら堪ったものじゃない。さすがに頭にカチンときたが、じっと我慢した。

「でも、警察なんかに突き出さないでね。必ず敵を討つだよ」

「わかってるよ。でも、間違いだと困るからもう一度確認するよ。君は犯人の顔を直接見ていないんだね」

「ええ、居間でテレビ見てたとき、いきなり後ろから首を絞められたんで見てないわ。でも、絞められる寸前に、窓のガラスに映る犯人の顔をチラッと見たのよ。死んでも忘れないわ」

「頬に大きなほくろのある男だね」

「ええ、まん丸い顔の左の頬にそれは大きなほくろ」

「左で間違いはないね」

「窓ガラスが夜で鏡の状態だったから、逆さまに映ってたのよね。見たとき右にあったから左よ」

「よし、間違いはない、あの男だ」

頬のほくろという特徴だけで、この広い大都会に見つけ出すのは至難の技だった。しかし、執念というのだろうか、昨日とうとう隣町のA銀行xx支店のATMの前で見つけたのだ。

私は勢い込んで立ち上がった。

「行くの？だいじょうぶ？」

「胸ポケットに、一日半かかって先を磨いたアイスピックがある。これで一気に心臓を突き刺し

てやるさ」

「頼もしいわあ」

妻はうっとりとした目で私を見た。生きている間は一度もしたことの無い目だ。手遅れじゃなくて、こういうのを目遅れとでも言うのだろうか。

機嫌よく消えていった妻を見送って、私は男の家に向かった。隣町の、古ぼけたアパートに住んでいることは、昨日そっと尾行したのでわかっていた。

駅からアパートにいたる、人通りのほとんどない路地で男を待ち伏せた。両端が黒くなった蛍光灯の街灯が、頼りなくその足元を照らしている。

男はほろ酔い気分でやってきた。男が街灯の下に来たとき、私は姿をあらわし、おいっと声をかけた。

ぼんやりとこちらを見た目が、すぐに驚愕の目に転じた。その目で私は確信した。こいつだ！こいつに違いない。

「あんたは……」

と男が言い終わらぬうちに私はアイスピックを突き出した。

思いのほか簡単にズボッと突き刺さった。

地面に転がった男は二三度痙攣した後、ピクリとも動かなくなった。

私は男の顔を覗き込んだ。

左ではなく、右の頬に大きなほくろがあった。

妻が見たら、人違いよとヒステリックに叫ぶにちがいない。だが、私は満足の吐息を漏らした。

背広のポケットから一枚の紙切れをとりだして破いた。この男が匿名で四日前書いてよこしたものだ。それにはこう書かれてあった。

——お前がお前の女房を、後ろから首を絞めて殺すところを、俺は、窓の外から一部始終見ていた。五百万円をA銀行××支店の口座に振り込め。さもないと、このことを警察に告げる——

男と女の迷い道

<http://p.booklog.jp/book/70641>

著者：いちべえ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ichibeekk/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70641>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70641>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ